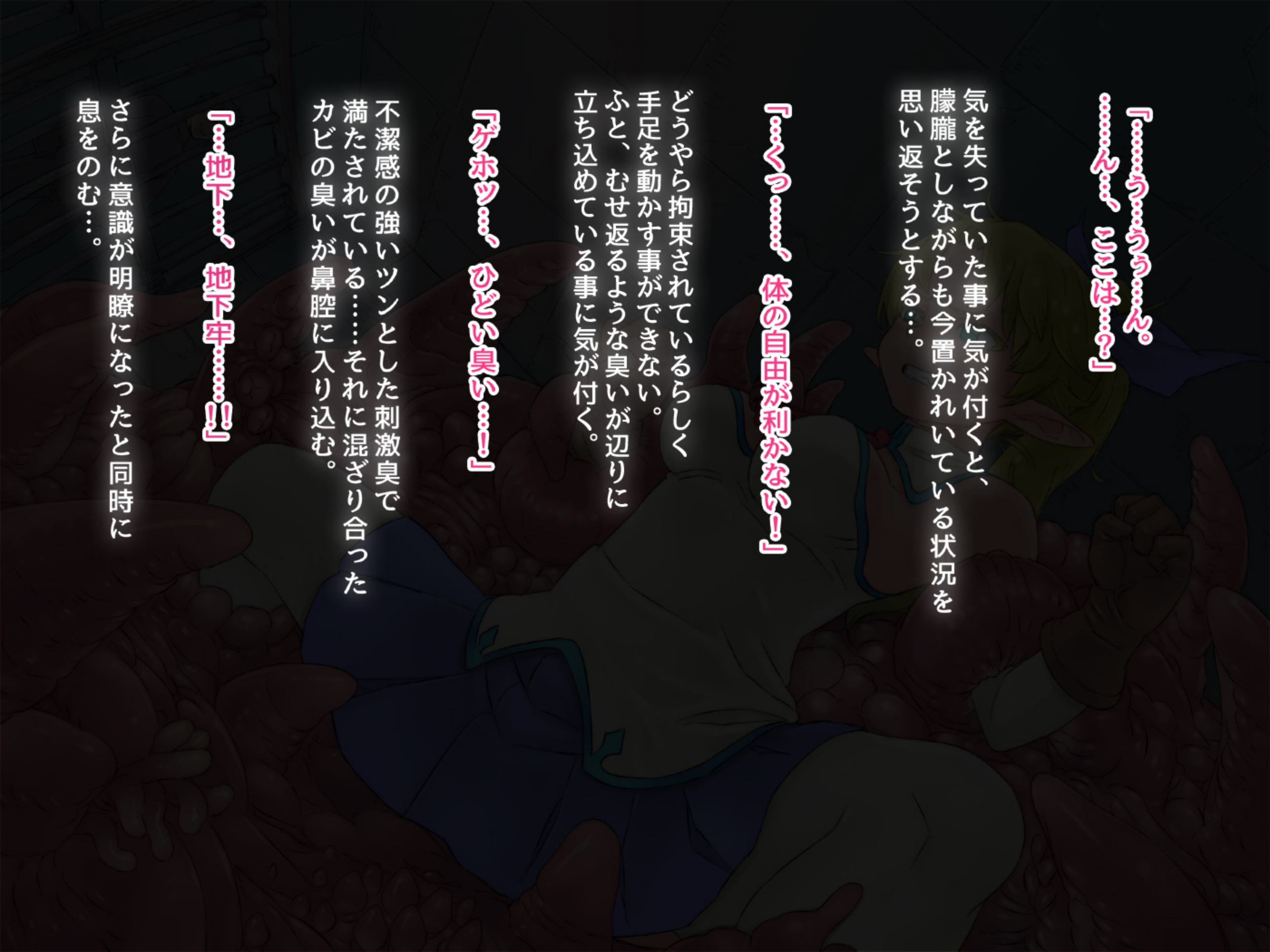


「……う……うぅ……ん。
……ん……、ここは……？」

気を失っていた事に気が付くと、
朦朧としながらも今置かれている状況を
思い返そうとする……。

「……くっ……、体の自由が利かない！」

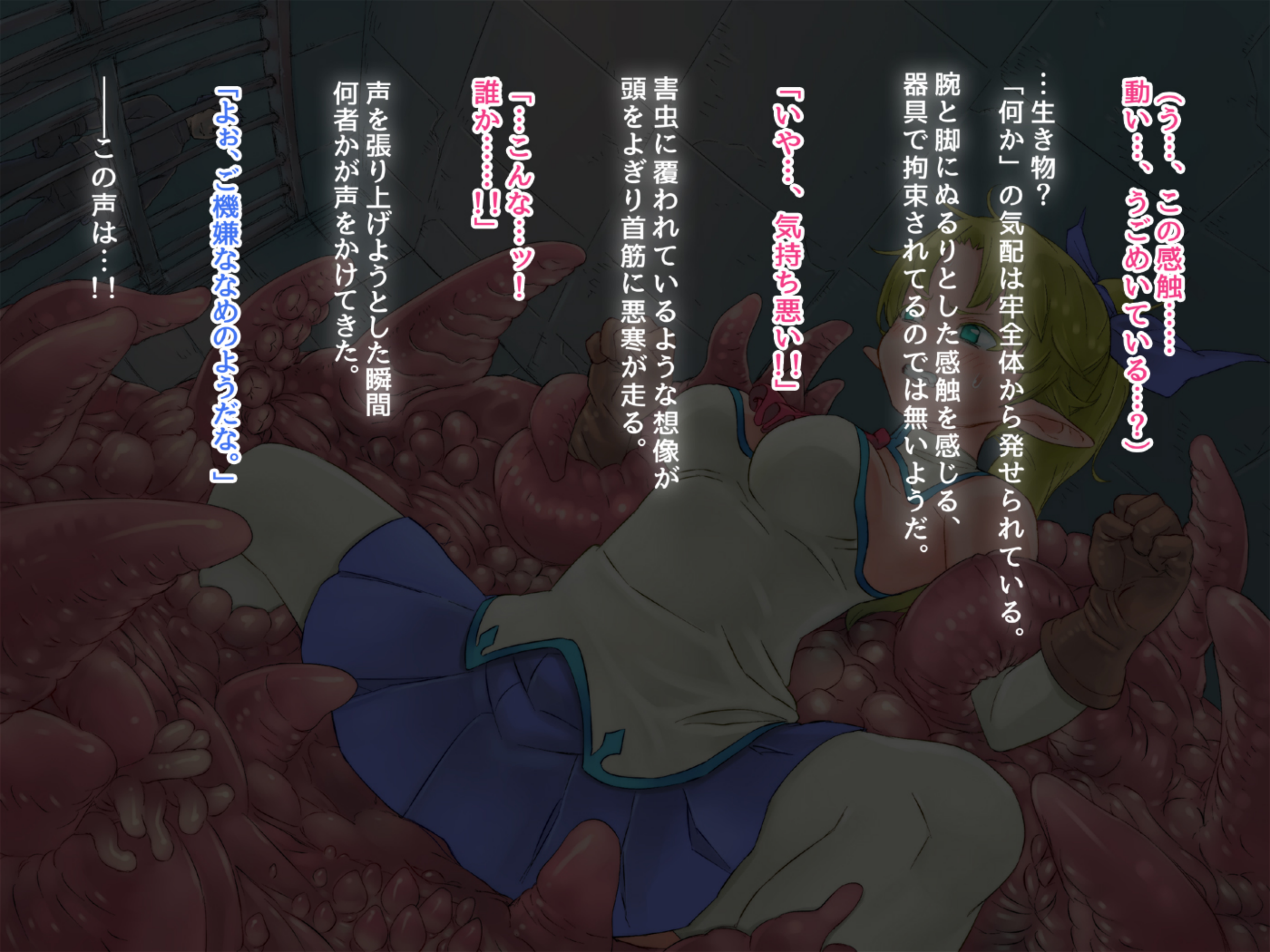
どうやら拘束されているらしく
手足を動かす事ができない。
ふと、むせ返るような臭いが辺りに
立ち込めている事に気が付く。

「ゲホッ……、ひどい臭い……！」

不潔感の強いツンとした刺激臭で
満たされている……それに混ざり合った
カビの臭いが鼻腔に入り込む。

「……地下……、地下牢……!!」

さらに意識が明瞭になったと同時に
息をのむ……。


（う…、この感触……
動い…、うごめいている…？）
…生き物？
「何か」の気配は牢全体から発せられている。
腕と脚にぬるりとした感触を感じる、
器具で拘束されてるのでは無いようだ。
「いや…、気持ち悪い!!」
害虫に覆われているような想像が
頭をよぎり首筋に悪寒が走る。
「…こんな…ッ！
誰か……!!」
声を張り上げようとした瞬間
何者かが声をかけてきた。
「よお、ご機嫌ななめのようだな。」
――この声は…!!

ルッ、夜逃げの男がいると聞きたと…

ははっ、甘いねぇ。少しは剣術をかじってるようだがそれじゃぁ駄目だ。
真面目ってえか純粋すぎるよなぁ、お稽古しか経験がないんだろ？
……っ、何が目的なのですか…。
それは自分の目で確認するんだな！よし、連れて行け!!

麻袋に押し込まれ
荷馬車に揺られながら強制的に
目的地へ移動させられる。

耳は塞がれていない、
意識せずとも男たちの話が
耳に入ってくる。

『……の……たこ……、
……だか……かみ……なあ……。』

しかし荷馬車の雑音がひどく
うまく会話を咀嚼できなかった……。

――どのくらいの時間が経っただろうか、
一時間……いや、二時間……。五感の一部を
塞がれたためか感覚がつかめない……。

（この音は……城門？）

（間違いない、城だ。
……城にこんな連中が出入りしている？
なぜ……。）

『よし、到着だ。……マドモアゼル、
袋詰めの旅は快適だったでしょうか？』

男は嫌味ったらしく肩を揺らしながら微笑んだ。

見てみろよ、くっせぇタコだろ？こいつが「神」だってんだから笑うしかねぇよな。

おっ、もう嗅ぎつけたのか、

相変わらず気忙しいヤツだ、我慢ってのを知らねぇんだからよ。

…なに…これ……。

それを目にした途端にフッっと体から力が抜け…

「おっと、気ィ失っちまったか。
まあこっちとしては
おとなしい方が好都合だな…。」

ここから出しなさい！こんなことを…どうして？！
そうわめくな、きっと気に入るぜ？
…ッ
…下劣な！恥を知りなさい！
職業に貴賤無しって言うじゃねぇか、少しは敬って欲しいもんだぜ…。

?…溶け…!
!…いや…たっ…
助けて!!
心配するな
大丈夫だ、
骨になったりは
しねぇからよ。
……!!
だめ…見るな!
見ないで…っ!
ジワァ…
シュウ
ジュウウ…
じっくり見てやるさ。
…しかしこんなタコには
勿体ねぇなぁ。

ッ……!!
挿…っ、
やめさせて!!

どうだ感想は?
痛いか?

あっ…

ビクッ

あっ?
う?

ズル…

ズブゥ…

ズル…

（何…どういうことなの…、痛いどころかこれは…。）

皮膚に一切の損傷は見受けられない。
男の言った通りあの液体は衣類を溶かしただけのようだ。

そして何よりもおかしいのは初の行為にも関わらずソレが私の中にすんなりと入っている事実だ。

「ああ、言い忘れていたなあ。」

「…何を…ですか。」

恐る恐る訊ねる。

「地下牢に広がるこの淀んだ空気もまたコイツの一部だ。」

「…？…！」

「お前はもう取り込んでいるのさ、コイツをな。だからもう…。」

「まだ！」

男の言葉を遮るように声を荒げた。

ッ……！！
やめさせて！！

ズル…

ズブゥ…

ズル…

あっ…

どうだ感想は？
痛いか？

（うねる度に足の指先まで電気が走るような…、だめ…こんなっ…お願い…早く…早く終わって!!）
あくっ…
仲間たちがここを突き止めっ…
今に…
んっ
いっ
ぞくっ
ピクンッ
ズチュッ
ズッ
ヌチュッ
ズッ
効くだろ？我慢するのは体に毒だぜ？

逃げ出す方法はない…
生理的に起こる体の反応を
意識して止めることなどできるはずもなく
なすがままに、ただ悶える他なかった。

（…!!）

その時、明らかに律動が変調する。
中でうごめく触手が脈打ち始めたのだ。
それと同調するかのように私の中も
同じ反応を始めた…。

脈は早くなり、手足に力が入る
呼吸は浅くなり、歯を食いしばる。

『〜〜〜〜〜〜ッ!!』

次の瞬間、下腹部から脊柱を伝って
脳へ電撃が走った。
その衝撃に、思わず呼吸と思考が止まる。
電撃の流れはとどまらず、身体の隅々にまで駆け巡った。

「派手にイったなぁ、オイ。
どうだ、すげぇ快感だろ？
ここに居ればいつの間にかコイツと一心同体に
なっちまうのさ…。
絶頂も同調するなんてロマンティックだよなぁ。」

…一体…なに…が…
はぁ
はっ
ブルッ…
ビクッ
ビクンッ
それを知っちまったらもう後戻りできねぇぜ。
まあ仲良くやるんだな。
ガクッ
ブビュルッ
ドクンッ
ドクッ
ガクッ
…誰がこんな奴と…